

中等英語教育における、米国文学とジェンダー・セクシュアリティ —高等教育での教材選定と模擬授業を通して

千代田 夏 夫 [鹿児島大学教育学部 (英語教育)]

American literature, gender and sexuality in English education at junior high school: Selecting literary works and simulating classes

CHIYODA Natsuo

キーワード：英語教育、アメリカ文学、中等・高等教育、教材、ジェンダー・セクシュアリティ

・はじめに

本稿は2014年度前期に鹿児島大学教育学部・法文学部共通科目として開講された「英語科指導法Ⅱ(英米文学)」(半期完了)のレビューをもとに、中等教育における英語科教材としての米国文学の可能性を探るものである。昨年度開講の同授業についても拙稿¹を記したが、本年度は「ジェンダー・セクシュアリティ」の視座を加え、その枠組みの中で学生諸氏に動いてもらった点が大きな特徴である。高等教育における文学作品の教材としての可能性については多くの先行研究が見られるが、中等教育における英語教材としてアメリカ文学作品を導入することあるいはその可能性を議論する高等教育についての先行研究はほとんど見られない。しかしその中で大学学部教育すなわち高等教育内

における、後期中等教育すなわち高等学校教育におけるアメリカ短編小説の導入をめぐる関戸の論考は注目に値する²。

本授業は現行の『中学校学習指導要領(平成20年3月告示平成23年4月全面実施)³に拠る中学3年生の英語の授業を想定し、教材選定および模擬授業の実行を基本とするものであるが、想定される14-5歳の、現代日本社会の強制的異性愛主義下ないしホモソーシアリティ下における性の面での「ゆらぎ」に鑑み、ジェンダー・セクシュアリティのテーマを設定した。現代日本社会における特に10代の「性的マイノリティ」をめぐる状況は劣悪と見てよいものであり、正しい知識に基づく偏見の払拭が日も早く望まれる⁴。『厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究推進事

¹ 拙稿「中学校英語教育教材としての米国文学作品—大学学部教育におけるテキスト選定作業を中心に—」『鹿児島大学教育学部教育実践紀要』第23巻、95-102。

² 関戸冬彦「英語教育実践報告 短編小説を用いて教室をより活性化させる実践事例研究」『獨協大学国際教養学部言語文化学科紀要 マテシス』第16巻第1号2014年11月、75-96。2013年度日本英文学会 関東支部第7回大会(2013年6月22日 於明治大学駿河台キャンパスタワー)における土屋結城・伊澤高志「英語教育における「文学」*New Horizon*を読む「行為からの一考察」も「中学校でのシェア33.2%で6社中トップ」である中学校向けの検定教科書*New Horizon*を代表例とした貴重な研究である。「日本英文学会『第86回大会 Proceedings』」,169-70。

³ 文部科学省『中学校学習指導要領 平成20年3月告示 平成22年11月一部改正』(東山書房、2011)。

⁴ NHKオンラインが2008年に掲載した平田俊明「同性愛者の自殺について考える(1)~(4)」参照。<http://www.nhk.or.jp/heart-net/mukiau/shirou3.html> 2014/9/21アクセス。精神科医の平田は、「同性愛者の自殺念慮(自殺を考えたことがある)、自殺企画(実際に自殺を企画し、行うこと)の確率の高さについて欧米では各種調査で頻繁に取り上げられ問題視されているが、日本国内ではそのことに言及されている公の文言を見かけることはほとんどないこと、日本の政府は自殺防止の法案も作っているが、そこに『性的マイノリティ』のことが含まれていないこと」を述べ、「欧米の調査では、同性愛者の自殺企画率がそうではない人と比べて数倍高いという結果がくり返し報告されており、過去20年間の文献をレビューした結果、(米国の高校生全体の自殺企画率が7~13%程度と推定されるのに対し)思春期のLGBの自殺企画率については一貫して20~40%程度の数値が報告されていると、ある米国の文献で述べられている。日本でも、LGBT(レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー)の自殺念慮や自殺未遂については研究調査の結果があり、それを見ると欧米同様に日本も深刻な状況にあることがわかる」と論じる。

業「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2」(このようなタイトル自体、ゲイ・バイセクシュアルとエイズ・HIVを直結させる偏見を助長するものではあることを付記しておく)ではインターネット調査“Research Online 2005”において約6,000人の回答者から5,731人(男性対象、平均年齢30・8歳、年齢構成は10代6・5%、20代42・4%、30代35・5%、40代11・4%、50代以上3・6%)の有効回答を得、様々な設問と解答が掲載されているが、「教育に願うこと」の設問では、「小、中、高の性教育で同性愛についてきちんと扱うべきだと思う」「男の子と女の子が恋愛をするのが当たり前、という教育の在り方では、いつまでたっても一般の人からはゲイは宇宙人のような存在のままだと思う」「学校に通う時期と思春期とは重なる部分が多い。自分が性的指向を自覚した時に周囲はヘテロの人間で溢れており、その環境で生み出された疎外感にいまでも苛まれている」「人生初期の学校教育から性の多様性を教えることで、マイノリティにとっては社会の抑圧を軽減することになり、よりよい人生を進む糸口として機能するだろう」「同性に惹かれる存在もあること、そういう指向の人でも人間的価値は同じであることを初中等教育を通じて広めてほしい」「同性愛に悩みかつて学校で匿名の相談をしたが苦い経験となった。現在の学校の性教育で同性愛についてカ

リキュラムに入っていることを願う」等の回答が見られた(24)⁵。「強制的異性愛」⁶

「ホモソーシャルリティ」⁷等の基本用語についての教授は、全国的に見ても大学学部生向けの高等教育において、まだほとんど為されていない点から、本授業は中学生向けの講義を想定しつつ、高等教育におけるジェンダー・セクシュアリティ、クイア・スタディーズの面を持つ意義も大きく有ることとなった。なお本授業は学部2年生から4年生までが受講したが、受講者全員が学問領域としてのジェンダー・セクシュアリティ研究、クイア・スタディーズ以前のフェミニズム関係の授業の受講経験がなく、上記の基本的タームについても初めて知るという次第であった。今後の中・高等教育におけるこれらの分野の更なる展開、開講が強く望まれる⁸。

1. 英語教育教材としての文学作品の意義

昨今、実用的英語の学習と修得ののちの文学という、「応用」という理解が往々にして聞かれるが、両者は不可分のものであり、ヘミングウェイ短編を英語教育教材に用いる理由としてPavloskaが自身の四半世紀に渡る日本での教育経験に照らして、「文学は初級レベルを超えた学生にとって、最上のインプットとなる」「(日本人学生)が文化的象徴としてヘミングウェイに親しんでいるから」と

⁵ 「ゲイ・バイセクシュアル男性を対象として、2005年、京都大学大学院医学研究科の日高康晴氏(当時。現在は関西看護医療大学講師)らが国の補助を受けてインターネット・ホームページ上で行ったアンケート調査(2005年8月~11月調査実施)によると、約6,000人が回答したうち、3人に2人がこれまでに自殺を考えたことがあり、14%は実際に自殺未遂の経験があるとの結果が出た(有効回答数5,731)。この割合は1999年調査実施(有効回答数1,025)とほぼ同率であった」日高康晴・木村博和・市川誠一『厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2 厚生労働省エイズ対策事業「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」成果報告』http://www.j-msm.com/report/report02/report02_all.pdf 2014/9/21アクセス。

⁶ 異性愛のみを正常とする近代社会の抑圧を示すこの語は、1978年アドリエンス・リッチの使用によって広く用いられることとなった。Adrienne Rich “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence” in *Blood, Bread, and Poetry: Selected Prose* (New York: W. W. Norton & Company, 1994), 23-75.

⁷ 「ホモソーシャル(homosocial)」の語・概念はセジウィックの1985年の著作*Between Men*によって本格的に用いられることとなった。セジウィック自身はそれ以前からも「歴史と社会科学の分野で時折」用いられていた用語であると説明するが(1)、今日の社会分析に欠かせないものとなったのはセジウィックの当該著作によることである。Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (New York: Columbia University Press, 1985).

⁸ 最近の研究成果として眞野豊「学校教育とクイアネス」『第七回地球社会統合科学セミナー 多様性共存の可能性 ジェンダー・セクシュアリティ・クイアの観点から』2014年7月25日(主催:九州大学大学院地球社会統合科学府)於九州大学伊都地区稲盛財団記念館1階稲盛ホール。

述べるように、文化の一側面を学ぶ教材としての文学の意義も大きい⁹。奥村の「文学作品を読むことは、その国の文化的、歴史的背景を知ったり、その言語を豊かに彩る言いまわしや表現を学んだりするのに適しているだけでなく、ホール他が指摘するように、いったん物語にのめり込むと、学習者の自発的な学習を引きだすという点で非常に効果的」(傍点筆者)との指摘も重要である¹⁰。拙稿に示したように、その人々の暮らしの基盤にある宗教への学習理解等の好機ともなる¹¹。また文学学習/研究は情操教育即ち想像力の涵養という面も大きく有する。それは昨今の(英語)教育におけるキーターム、「実践的英語」と「グローバル化対応」とは表裏一体のものであると言えよう。2013年12月13日に発表された文部科学省による計7頁から成る「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」¹²においては、(案)として中学校では「授業は英語で行うことを基本とし」(3)「2014年度から指導体制整備を強力に推進」(5)とある一方で、最終頁の7頁を全て割いて「日本人としてのアイデンティティに関する教育の充実について」において国語教育における「古典に関する指導を重視」「文学教材の充実」(7)等が記載される。このようにある国のアイデンティティの根底には文学の存在が大きいのであり、なればグローバル化に必須とされる英語とそれに基づく相互理解において、相手国の文学もまた同じだけの重要性を有すると考えられるのである¹³。上記計画の冒頭には「高校卒業段階で英検2級～準1級、

TOEFLiBT57点程度以上等」「外部検定試験を活用して生徒の英語力を検証するとともに、大学入試においても4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格・献呈試験等の活用の普及・拡大」(1)の記載があるが、英語能力は日本語能力同様、このような外部試験に基づくテクニカルな実践的アプローチのみによって養成されるものではないだろう¹⁴。真の意味での「グローバル化」を目指す英語教育のために、ジェンダー・セクシュアリティ研究、クイア・スタデーズ、race, class, gender¹⁵に代表される「多様性」への理解と寛容というテーマにおいて、文学はこれらのテーマ・分野を総合的に学ぶ最適な切り口と考えられるのである。

本授業は内容の性格上演習に近いものであり、模擬授業がいわば通常授業の「発表=プレゼンテーション」となる。しかし一回の講義90分内で2グループの発表という授業計画の中、中学校の授業一時限50分という枠をそのまま使うことは不可能であるので、模擬授業を行いつつ適宜短縮化するという、融通性が求められる。自らが受講生である大学の授業(高等教育)と自らが指導者の立場に立つ中学校の授業(中等教育)が、複数の次元で交錯する「二重性」については昨年度も指摘したところであるが、これは受講者はもちろん筆者すなわち大学においてこのような授業を開講する者の高いマネジメント能力も求められることを自戒とともに最初に強調しておきたい。上述のテーマもとのワークシート課題は必然的に「恋愛」について少なからず個人的な面を表現するこ

⁹ Susanna Pavloska「ヘミングウェイの短編を用いたラジオプレイの試み」吉村俊子・安田優他編著『文学教材実践ハンドブック―英語教育を活性化する―』(英宝社、2013)、162-165。

¹⁰ 奥村真紀「味読の楽しみ―英文学作品の言書を使った精読」『文学教材実践ハンドブック』、25。

¹¹ O. ヘンリー「賢者の贈り物」における「クリスマス」の日米の意義の相違を参照、拙稿101-2。江藤はミルトン(John Milton, 1608-1674)の『失樂園』(Paradise Lost, 1674)を通じてキリスト教文化を学ぶ実践報告を行っている。「ミルトンの『失樂園』で学ぶキリスト教文化―単語に込められた意味を知る」『文学教材実践ハンドブック』、102-105。

¹² 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afiledfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf 2014/9/18アクセス。

¹³ 英語教育における文学教材の重要性を説く最近の議論として、柳瀬洋祐・和田玲・関戸冬彦・中垣恒太郎・鈴木章能「文学指導は学習者をどのように動機づけるか」、「語学教育Expo2014 外国語学習に対する適切な動機づけを目指して」プロシーディングズ72-6、2014。本資料に関して関戸冬彦氏より教示を受けた、記して謝す。

¹⁴ カート・ヴォネガット Jr. (Kurt Vonnegut Jr., 1922-2007)の「永遠への長い散歩」(“Long Walk to Forever,” 1960)は高校の検定教科書 *Prominence II* に収録されている。関戸、5。

¹⁵ 貴堂はこれにエスニシティを加える。貴堂嘉之「歴史のなかの人種・エスニシティ・階級」有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』(山川出版社、2009)、170。

ととなるが、これは大学学部生においてもなかなか躊躇われるところでもあり、そこは開講者（筆者）が必ず自身の課題答案を発表することを心がけた。

受講者は男性9名（内2年生2名3年生6名4年生1名）女性15名（2年生3名3年生10名4年生2名）計24名で構成され、内教育学部英語専修は11名でありその内の2名は米国文学専攻1名が英国文学専攻、他の8名および法文学部の5名は英語や文学を専攻としない学生であった。まずは外国文学作品を教材として用いる際には大きく分けて原著をそのまま用いる場合と簡易に書き直され訳注等が付いていることも多いretold版を使う二つの選択がある。双方の違いの確認のため、2013年度と同じくF. スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-1940）*The Great Gatsby*（1925）冒頭のそれぞれを配布し、教材としての適切さを議論した¹⁶。次にジェンダー・セクシュアリティというテーマに沿って何が出来るか言えるか、模擬授業という正式な形式にとられないグループによる発表を、アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）の“Cat in the Rain”（1925）¹⁷および“The Sea Change”（1931）¹⁸のどちらかを用いて行うこととした。前者では離婚間近を思わせる夫婦の会話を中心として妻側の台詞にジェンダーの揺らぎが見られ、後者では女性が同性の新しい恋人を得て振られてしまう男性が描かれる、ともに短編である。フィッツジェラルドと同時代のロスト・ジェネレーションを代表する作家でありながら、文体を筆頭に作風の全く異なる作家を示す意図が筆者にはあった。また昨年度と同授業において学生が模擬授業で用

いた作品中3編がヘミングウェイ作品であったことも考慮した。なおPavloskaはヘミングウェイの作品が日本人学生のリーディング教材として適している理由として、「実用的であり、言語学的にも、方法論的にもふさわしく、しばしば簡潔」との理由を挙げ、かつ「ヘミングウェイがよく知られている『男臭さ』よりももっと他のものを持っているということ」「男性と女性間のミスコミュニケーション、大人への成長、死への恐怖などのテーマ」を学生はすぐに知ると論じ、また2013年度の本授業でも教材として選ばれた“Indian Camp”にはJACETレベル0以上の語彙が14語しかない点を挙げる¹⁹。どちらをプレゼンテーションのテキストとして用いるかは各班の選択に任せた。この二編をもとにしたプレゼンテーションを行うことで、まずは24名中21名が英米文学非専攻者である受講者達自らが、英語文学読解とジェンダー・セクシュアリティのテーマに慣れ、そして教材としての「会話部分」の扱いやすさや授業計画作成を体験してもらうこととなった。その上で、学期中に二回のローテーションで30分を目安とした模擬授業を行ってもらうこととした。教材の選定からが学生諸氏の課題である。一回目と二回目の間にグループの分け直しを、初回同様グループ名を書いたくじを引いてもらうというやり方で行った。以下、これらの活動を通した準備期間「ウォーム・アップ」を学期初めの2コマを用いて行い、2コマを教室内における各グループの準備期間とし、いよいよ正式の模擬授業となった。以下各グループの選定した作品/テキストと模擬授業について論じる。なお基本的に発表グループを除き、筆者

¹⁶ F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (London: Wordsworth Classics, 2001), 2-4.F・S/ フィッツジェラルド『The Great Gatsby グレート・ギャツビー』（IPCパブリッシング、2006）、2-5。本作選択の理由については拙稿95-6参照のこと。

¹⁷ Ernest Hemingway, “Cat in the Rain,” in *The First Forty-Nine Stories with a Brief Preface by the Author* (New York: Scribner, 2003), 167-70.

¹⁸ Ernest Hemingway, “The Sea Change,” in *ibid.*, 397-401.

¹⁹ Pavloska, 163。作品の語彙数は教材への導入において重要な点である。「学習指導要領が定めた語彙の上限（中高の合計）は、1951年の6800語程度から1998年・99年の2700語程度にまで下がった」。江戸川春雄『日本人は英語をどう学んできたか—英語教育の社会文化史』（研究社、2008）、81。斎藤は戦後間もなく出版された高等学校用英語教科書*High School English: Step by Step*（開隆堂）におけるチャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-1870）の『デイヴィッド・コパーフィールド』（David Copperfield, 1849-50）の原文教材使用を挙げ、「文学教材が不当に敬遠されていることもさることながら、そもそも日本人大学生の英文読解力が著しく低下してしまった」ゆえにもはや高等教育においてもこのような「最高級な英文」の教材を導入することが難しくなったことを述べる。斎藤兆史「新時代の英語教育と文学—本ハンドブックの推薦分に代えて」『文学教材実践ハンドブック』、5-8。

も含め他の受講者には、当日まで作品名や模擬授業の形式などは一切不明であった。つまりテキスト選択も授業形態も、一切が学生諸氏の自由裁量に任されていたことを、ここに強調したい。各教材・発表についての考察は発表の行われた順番に則している。また各作品の版の選択も学生に任せられ、異稿等問題のある場合に教員が指導することとした（本年度は該当なし）。

2. 選定されたテキストと模擬授業

2-(1) “To My Mother”

最初に模擬授業を行うこととなった当該グループは、エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) の “To My Mother” を用いた²⁰。1時間50分×3時間=150分、模擬授業は第3回目の授業という体裁である。初回で作者や時代背景について学び、第2回で内容についてのグループワークを行ったのち、それまで伏されていた作品の題名を考えさせるとというのが主眼であった。内容をまず先に充分学習し、最後に端的にその内容を示すものである作品の題名を考えさせるというアプローチは、文学作品における題名の意義を身をもって確認するものでもあろう。グループワークで題名を考えるとという課題は実際の模擬授業でも行われたが、“Mother” “Dear Mother” 等々種々の意見が現れ、大学学部授業においても充分適用可能な授業案であることが明らかとなった。配布されたハンドアウト=教材はB5用紙一枚である。レイアウトの問題がまず挙げられる。当該グループはB5用紙の1/2以上に邦訳を載せ、その左に原文を日本語の2/3ほどのフォントで印刷したが、このようなレイアウトではまず日本語ばかりに目が取られてしまい、英語の授業教材としては相応しくない。また韻文を教材として扱うことのメリット・デメリットについて考えさせられる。利点としては以下が挙げられよう。1) 圧倒的に英語の分量

が少ないので物理的な「読む」負担が少ない2) 音楽性に富むことから音読に適しており、朗誦を通じて英語教育における「体感」が可能である。デメリットは1) 言語の抽象性が高まり一般的に散文よりも高度な文学理解が生徒指導者双方に求められる2) 英詩独特の押韻やリズムについても同様の理解が求められるということである。なお「平均的な大学1, 2年生を想定」しているが「英語力次第では高校生にも十分使用が可能」と「まえがき」に記される『English through Literature 文学で学ぶ英語リーディング』では二つのセッション(章)が俳句と英詩に割かれ、英語圏の日常生活における親近性を挙げてその音読も含め、韻文の積極的な教材使用を勧めている²¹。

当該グループは訳者渡辺信二氏の「ぼくの母—僕の生みの母は 若くして死に / しかも ぼく自身だけの母にすぎません でも あなたは / ぼくがそんなにも心から愛した人の お母さんです」という箇所に基づく「ヴァージニア：エドガー・アラン・ポーの妻の名」という注に基づき、ポーの妻の母親すなわち義母への思いを示したものと理解を基盤に授業を行ったが、ポーの場合、自伝的要素を持ち込む際には、相当に心を砕く必要がある。ポー27歳の時に結婚した従妹のヴァージニアは13歳という若年であり、ポーの性に関しては一般的規範からの(あくまで括弧つきではあるが)「逸脱」が見られる。ポーは性に関して臆病であったからこそ、性的に未熟な年齢の相手を選んだというのが通説であるが、教材として用いるときには近親姦や幼児性愛の問題が生ずるため、それらの問題に対して確固たる態度が取れるよう、教師側に相応の覚悟と見識が必要である²²。それも通り一遍にそれらの性愛のあり方を否定するのではなく、「性の多様性」ということを否定せずに、どこまで現行の社会通念や法と相容れるものかを照合した上での吟味が必要であり、それは中学3

²⁰ 以下、各グループがテキストとして使用した版を脚注に示す。渡辺信二訳『アメリカ名詩選—アメリカ先住民からホイットマンへ』(本の友社 A1997)、138-39。日本語訳は13

²¹ 斎藤兆史・中村哲子編注『English through Literature 文学で学ぶ英語リーディング』(研究社、2009)、iii、37-47。なお阿部は英詩の入門書においてデリケートな詩の本質を損ねるものとして、昨今の潮流に取って抗し、詩の音読に慎重な姿勢を見せるが、本稿ではやはり音読におけるメリットを重視したい。阿部公彦『英詩のわかり方』(研究社、2007)、58-63。

年生対象の議論としては負担が過ぎるかもしれない。ポーの韻文を教材に選んだグループは述べ3グループあったが、アメリカ文学史上燦然と輝く名詩の数々を生み出しているがゆえに、難しさも付随してくるのがポーである。なお「ヴァージニア (Virginia)」の語には南部人の自意識を強烈に有したポーにおいて南部アメリカとしての「ヴァージニア州」の意味も重なってくる。その点において当該グループには準備不足が見られた。単一の邦訳とその注に依拠するのではなく、複数の訳文の比較をはじめ、常により深い事前のリサーチが望まれる。また限られた時間という限界はあるものの、授業計画そのものに音読が入っていなかったことも悔やまれる点である。今回は内容学習の最後に題名を考えるというアプローチであったが、先にポーの作品と同じ題名を与え、英語による詩を作成させるというアプローチの可能性も、筆者によって指摘された。

2-(2) “Memories of President Lincoln” from *Leaves of Grass*

ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-1892) の長編詩集『草の葉』 (*Leaves of Grass*, 1855-92) から「リンカーン大統領の思い出 先ごろ私の前庭にライラックの花が咲いたとき (“Memories of President Lincoln, When Lilacs Last I the Dooryard Bloom'd”）」の第10カントー / ストロベ (canto/strophe) が選ばれた²³。ジェンダー・セクシュアリティ、性の多様性の一例として同性愛を筆者が学期初頭に挙げたため、男性詩人が男性の大統

領の死を悼むという図式に同性愛的要素を汲んでの選択であった。もちろんホイットマン自身の同性愛傾向を考えればこれは全く不自然なことではないのであるが、作者自身のセクシュアリティよりもまず、作品のみを見て教材に選んだ感性に敬意を表したい。先にポーの事例を挙げて韻文を教材として扱う際のメリット・デメリットを見たが、ホイットマンの場合、伝統的な押韻に縛られないブランク・ヴァース (無韻詩) の導入に文学史上の功績があるので、形式上の難しさは薄れると言ってよかろう。形式美の理解の難しさを体感することも大切であり、また形式から離れたところでより内容が自由に謳えるようになるということをもつて知るということも重要な体験となる。「同じ時代のアメリカに生きた二人」でありながら「この二人ほど対称的な詩人は少ないのではないか」と渡辺も論ずる²⁴ポーとホイットマンがともに韻文教材に選ばれたのは意義深いことであった。一詩人によって perfume, sweet, love といった親密性の高い語が大統領という国の最高位の人物にごく自然に用いられて違和感がない点に当該グループは注目し、詩人と暗殺された大統領との間に史実上の交流があったかは取敢えず²⁵、作品そのものから性的多様性のテーマを引きだした点をまず評価したい。個人の感情を謳っているうちにそれがアメリカそのものという普遍性にまで拡大してゆくのがホイットマンの特性であるが²⁶、本作は大統領暗殺という国家的事件をテーマにしなが、それが個人の次元にまで下りてくるという、また別の普遍性のあり方を示している点で重要な作品

²² 関戸は高校英語教育における F. スコット・フィッツジェラルド「乗り継ぎの三時間」 (“Three Hours Between Planes,” 1941) の教材使用について、作品の内容に鑑み「現代の、特に学生目線からの倫理観では「不倫」そのものが相応しいものとは思えないとする考え方もあるだろう」が、「恋愛、そして不倫、という主題、そしてそれについて考えることは、原題を生きる我々の社会における常識への懐疑、そしてある意味挑戦とも受け取ることができる」と述べる。関戸、98。

²³ Walt Whitman, *Leaves of Grass* (New York: New York University Press, 1965), 32. 『ホイットマン詩集 世界の詩 27』 (弥生書房, 1971), 127。

²⁴ 渡辺利雄『講義 アメリカ文学史入門編』 (研究社, 2011), 98。

²⁵ 「ホイットマンは、必ずしもリンカーンと口を利く機会は無かったが、しかしワシントン DC で暮らしていたことがあったため、当時、大統領がたえず馬車で行き来するのを目にしており、その回数は二〇回から三〇回におよぶ。またリンカーンが『草の葉』に感動して朗読したり、ホワイトハウスの窓から詩人の姿を認め、「あれこそ男のなかの男じゃないか」と述べたという資料も残る。巽孝之『リンカーンの世紀 アメリカ大統領たちの文学思想史』 (青土社, 2013), 171-2。

²⁶ 高田賢一・野田研一・笹田直人編著『作品ガイド 150 たのしく読めるアメリカ文学』 (ミネルヴァ書房, 1994), 27。

である。

授業計画は50分×5時間計250分、教材が多分に手紙と相通ずる要素をもつことから、「英語で手紙を書いてみよう」というのが最終目標となった。初回でホイットマンやリンカーンの伝記的情報を与え「日本語でラブレターを書く」ことを宿題に課す。第2回で男女ともに2名ずつのグループを計10班形成し、上述の日本語ラブレターの英訳を行わせ一度回収、3・4・5限で英訳の確認と各班の発表というものである。模擬授業で配布された教材はA4が4枚、原著と邦訳、「3行ラブレターを書こう」と題されたワークシートが2枚、「他のグループの発表を聞いて良い表現だなと思った部分を書きましょう」と指示された感想シート1枚である。一枚目の個人ワークシートでは「好きなもの」「好きなものへの気持ち」を書くよう指示され二枚目のグループワーク用で「班で決めたラブレター」「英語にしてみよう！」という手順になっている。個人から班作業へとスムーズに移行できるよう工夫のなされた構成であった。実際の模擬授業では約30分という制限もあり、適宜筆者の介入のもと、グループ内で上述2ワークシートを行った。結果は友人、母親、また好物のチョコレートに宛てた「ラブレター」等が現れ充実したものとなった。「三行ラブレター」というその三行という制限が眼目である。すなわち文字数を少なくさせることで、通常の書簡が非常に詩の形態に近くなるのである。教材は伝統的な詩形韻律に拠らないホイットマンであったが、この「三行ラブレター」においては筆者の介入により、伝統的な韻律重視でも自由詩でも形式は問わないこととした。詩そのものは時に、押韻や頭韻を優先させるために文法に沿わない英文を生み出し、また省略や倒置なども行われる。通常中学3年生の時点ではこのような「文法に合わない」非規範的な英文はもっぱら鑑賞の対象となるだけであるが、自らその作り手となることで、英語という「生き物としての言語」に取り組む好機を得ることとなる。そしてそれはとりもなおさず英語の、あるいは性に代表される人間の存在の多様性の体感となるの

である。初回の関連人物の基本情報の講義においては、教師役たる学生自身理解できていない「自由詩」「民主党」「共和党」等の語がただ読みあげられる様子が見受けられた。資料からの引用を孫引きするだけではなく、特殊用語専門用語に関しては万全の理解をもって臨みたい。

2 -(3) The Sun Also Rises

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の長編『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926) の第六章である²⁷。A4三枚にわたる指導案に加えて教材とする箇所二頁、ワークシート2枚の配布である。本授業では模擬授業の形式を特に指定しなかったが、該当グループのように指導案を作成したグループは少なからずあった。指導案/計画の作成と配布は教育学部ならではの成果であり、馴染みのない他学部学生への良い刺激ともなると言えよう。単元目標は「米国文学を通して、ジェンダーセクシュアリティ―(ママ)について考え、自分の意見を持ち、発表できるようになる。また、米国文学への興味を持ち、文学作品の鑑賞の良さに気づく」と、担当者である筆者の意図を十分にくみ取った内容となっている。ただ更に追加するならばやはり中学3年生の英語の授業という枠組みである以上、英語教育教材としての可能性について触れてほしいところである。これは学期を通じてしばしば、英語の授業か現代国語の授業か分からないとの声が学生諸氏から聞かれた件とも直結する問題である。「文学を通して人間存在を理解しよう」とつとめることに英語も日本語も言語の別はないのであるからこの混在は必然ではあるのだが、「英語科指導法」の枠組みにある以上、常に足場を確認する態度を忘れずにいたい。なお引用内にママと記したが「ジェンダー・セクシュアリティ」が通常の記載の仕方であることも指摘した。これは既に述べた、高等教育におけるジェンダー関連の授業の面も本授業が有している点の一例である。「単元について」の項目の「児童について」においては「(中学3年生は) ジェンダーセクシュアリティ―(ママ)へ

²⁷ Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's and Sons, 1970).

の表立った関心は見られないが、関心をもって学ぶことができる精神的な適齢期にある」と記されている。

当該グループのテーマは「結婚観の違い」であり、第六章を7限に分けて読み解く。とくに「ロバート・コーンとフランスの結婚観の違いについて読み取る」とした第6時が眼目となろう。指導過程は導入、展開、終末の三部に分別され、注目点としては特に登場人物らの関係性を明らかにしたワークシートおよびそののち、それを劇として行うという点である。このワークシートでは男女の性別が示された5名の人物とその間の「友情」「信頼」「婚約者」等の関係性が記されており、そこに実際の名前を、原文読解を通して当てはめてゆくという構成である。模擬授業でもこのワークシート課題が実際に各グループ単位で成されたが、当日即座に原文を読み取る難しさを考慮しても、良い意味での難易度の高さが見られた。またホイットマンにおいては同性愛がテーマとなったが、ここではいわゆる「性的少数者」ではない異性愛の男女の「結婚」というものもまた、ジェンダー・セクシュアリティというテーマに充分合致するものであるという確認がなされた意義は大きかった。二枚目のワークシートでは自分自身、小説内の登場人物、グループとしての結婚観まで、個人レベルからグループレベル、また虚構と現実という複数の次元にわたることにより、自分自身の意見を確認・表明することから始まって虚構の人物内を「追体験」し、また自分とその周辺のリアリティに戻るといふ、文学作品を義務教育に持ち込むといふことの意義が端的に示される構造となっていたことは非常に高く評価すべきものであった。なお作品はヨーロッパを舞台にしているため特に人名地名等の固有名詞にあらかじめの説明が必要であること、また作家の説明としてワークシートで用いられた「ロスト・ジェネレーション」の語と題名の由来は作品の

ピグラフに引かれたアメリカ人作家ガートルード・スタイン (Gertrude Stein, 1874-1946) の言と旧約聖書の「伝道の書 (Ecclesiastes)」に依拠するもののため、エピグラフ自体の配布とその用語群の説明が必須であるとの指摘が筆者からなされた。

2-(4) *Flowers for Algernon*

ダニエル・キイス (Daniel Keyes, 1927-2014) の『アルジャーノンに花束を』 (*Flowers for Algernon*, 1966) である²⁸。文学のジャンルではSFすなわちサイエンス・フィクションとされるが、もはやその語が醸し出す特定のイメージを超えた名作として親しまれており、昨年度も教材として選ばれた²⁹。週3回を4週間計12時間でエンディングを除いた「レポート13」までを、男女別に5人8グループで扱う計画である。自身と同じ手術を受けたネズミが死んでいることを知っている場面までは生徒に示しつつ、エンディングを敢えて伏して予想させるという点に特色が見られた³⁰。本作はほとんどがロボット手術を受けるチャーリーの「レポート」小説であり、模擬授業で取り上げられたのはまだスベルミスが頻出する「ほこくさん」“3d progris riport” [sic] である。当該グループのアプローチでまず独自性が見られたのは、スベルミス等の「間違い」を生徒に見つけさせて「何がそれを引き起こしているか」を考えさせるというものであった。結論を先んずれば「耳で聞いたまを文字化している」ということなのだが、間違いであっても文学作品上の「活字」として無条件に受け取ってしまいがちな受容のあり方に一石を投ずるものであった。

ジェンダー・セクシュアリティのテーマに関しては手術後知能の高まったチャーリーがレポート9において「他人を意識する」場面を教材として用い、ワークシートの「チャーリーが女の人を意識し始めた時の気持ちを抜き出そう!」「初めて

²⁸ Daniel Keyes 『Flowers for Algernon』 渡邊容子解説 (講談社ワールドブックス, 1995)。ダニエル・キイス 『アルジャーノンに花束を (ダニエル・キイス文庫1)』 小尾芙佐訳 (早川書房, 1999)。

²⁹ 拙稿, 102。

³⁰ 当該グループとは正反対のアプローチであるが小説の結末部分の重要性を示すものとして、「短編小説の結末部分を読み、エンディングの重要性」を考える教材としてレイモンド・カーヴァー (Raymond Carver, 1938-88) 作品を扱う「Session 8 Raymond Carver の短編小説—小説の結末部分を読む—」『English through Literature 文学で学ぶ英語リーディング』, 33-36を参照。

他人を意識し始めた時の気持ちを思い出してみよう！」という二問に取り組むというものである。後者の、「初めて「他人」を」というところが肝要である。性の多様性を英語教育における文学の学びを通してどう扱うかというテーマであるから、異性愛前提の、通常よく見られる「異性を意識」といった記述は必ず避けなければならないのである。模擬授業でも各グループから活発な意見がなされたが、初恋や急に発達した友人のファッションセンス、第二次性徴期のエピソード、また女子高時代のバスケットボール部のキャプテンの「格好よさを意識して廊下ですれ違うたびにドキドキした」という実体験を離してくれた女性の学生もあった。最後のあくまでも構造的に見れば同性愛的なエピソードに関しては、ここまで忌憚なく語ってくれる学生があらうとは予測していなかったので、筆者も当惑をいかに表わさずに、既述の当該講義のテーマに即して話題を広げてゆか、力量が問われた瞬間でもあった。既に同性愛や近親姦あるいは強制的異性愛、ホモソーシャルリティ等の基本用語を説明し、頻用している中でこのことであったので、受講者たちが動揺することもなかったが、これは中等教育においてそのような場面が想定される中、教師側のマネジメント能力がいかに必要であるかを如実に示す例である。「他人を意識する」というテーマ設定は、ジェンダー如何以前の「他者」の問題として非常に重要である。またとすれば「性的マイノリティ」に比重が置かれがちなこのような授業にあって、上述のワークシートにおいて異性愛で「も」もちろん良い、との机間指導が見られたことも評価に値する。なお模擬授業中「精神薄弱者」の語の使用が見られたが、これは今日避けるべきであろう。差別用語の基準は被差別者の権利の回復にしたがって時時刻刻変化しているものであり³¹、当該グループが使用した1995年

の翻訳では見返しに堂々と印刷されている「精神薄弱」の語も、2014年現在では不適切である旨、常にこのような問題と対になって現れるいわゆる「言葉狩り」の議論とともに、筆者によって紹介・指導がなされた。また知能に障害を持つチャーリーがロボットミ手術を受ける話であるため、「正常」「ふつう」の語がどうしても頻用されがちであったが、そもそもジェンダー・セクシュアリティにおいて何が「普通」で「正常」なのか、その線引きを問い直すのが本授業の目的であったため、その点にも注意を促した。なお昨年学生諸氏によってこの作品が取り上げられた時期は、ロボットミ手術を受けた叔母をもつキャロライン・ケネディ米国大使の日本赴任と時期が重なったが、今回は作者キイスの死から4日後という奇縁であった。

2-(5) *The Turn of the Screw*

米国学史上でもその難解さをもって知られるヘンリージェームズ(Henry James, 1843-1916)の中編『ねじの回転』(*The Turn of the Screw*, 1898)が選ばれた。高等教育における通常の米国学講義ないし演習のテキストとしても扱いにくい作品であるが当該グループはretold版を用いることで巨人ジェームズの名作を中学校の英語教育に導入した³²。生徒は36人学級を想定している点が40人想定他グループと異なるが、「英語の長文読解には慣れていないが、文学作品を読んだことはない」という指導案記載の想定像に大きな違いはない。当該グループもA4二枚の指導案を提出、50分×10時間でretold版の全編八章を扱う。retold版が簡易なため、前もっての教師側からの単語についての注釈もつけないという。全24章から成る原著は複雑な語りの重層構造が読解を難しくしているのであるが、今回のretold版では語りはすべて家庭教師のみの一人称に単一化されていることで、

³¹ 星乃の以下の言を胸に刻みたい。「同性愛など実は問題はない、というのが本書での一つの到着点だが、ただそれは少なくとも現時点では「ヘテロ」側から発する言葉であってはならない-中略-どうでも良いことをどうでも良くなくしてきたのは、歴史的に形成されてきた「われわれ」=「同性愛者」ではない-中略-嘲笑の対象となり、嫌がらせを受け、撲殺され、自殺を考えた「われわれ」にこそ、「同性愛なんてどうでも良いじゃない」と言う特権がいったんは許される」(傍点筆者)。星乃治彦『男たちの帝国 ヴィルヘルム2世からナチスへ』(岩波書店、2006)、202。

³² Henry James, *The Turn of the Screw*, retold by Christine Lindop, eds. Bill Bowler and Sue Parminster (Sydney: Oxford University Press, 2002).

読み易くなっている。指導案では「この物語から読みとれそうな恋愛関係・愛の形」として、「家庭教師→(家庭教師を雇った姿を見せない) 旦那様」「(少年) マイルズ⇄家庭教師」「(既に死亡している男性使用人の) クイント⇄マイルズ」「クイント⇄(既に死んだ前任者) ジェスル」を例として挙げている。「→」「⇄」はそれぞれ片思い両思いを示している。なお本格的なジェイムズ研究においては本作はしばしばクエア・リーディング(文学作品中の同性愛的要素を積極的に読みこむ文学研究の態度)の対象となり、死んだクイントが生前に少年マイルズに性的なイニシエーションを行っていたという論も定着している³³。また今日では語り手の家庭教師が見た幽霊たちは全て彼女の妄想であったとする精神分析的アプローチに基づく解釈が七割を超えるという³⁴ことも付記しておく。しかし、筆者のような文学専攻の研究者がとすれば陥りがちなことであるが、本稿が扱う種類の授業において、緻密かつ細分化を極める専門的な研究動向を必要以上に気にする必要は、とりあえずはない。retold版を使用するならなおさらである。

当該グループが指導目的に記す「文学作品に慣れ親しむ」「文学作品を深く読む力をつける」とくに後者において示された二点「テーマに即して読む」「作品中にない部分を想像することで、内容をより深く考えることができる」に注意したい。これは、一見正しい指摘のようであるが、「作品中に『ない』ものは扱えない」という文学作品に向き合う基本的な態度に鑑み、「表面上には現れていない/直接は書かれていない」との訂正を行った³⁵。模擬授業では最後の10限目、指導計画には「作品中发现した恋愛のその後を考える。グループごとに発表する」に該当する箇所が行われた。あらすじを説明するための第一章のテキストコピー3頁、ワークシート2枚が指導案に加え

て配布された。「作品に描かれていない『その後』」を考察の対象にすることは上述のように文学研究においてはある種の禁じ手ともいうべきものであるが、これも既述のように、まずは当該授業が中学生への米国文学への誘いであることに鑑み、その旨を指摘した上で、あえてそのまま取り組むこととした。ワークシートにおける「グループで特に注目した恋愛関係・愛の形」では、家庭教師から10歳の少年マイルズへの愛の指摘が目立った。ポーの場合もそうであったが、大きな年齢差というデリケートな問題を、いかに茶化さずに真剣に考えるかが授業進行の要となるのであり、ポーの場合同様、筆者自身が緊張を強いられた場面であった。そもそも通常の社会規範で「逸脱」と考えられるものが往々にして主題となるのが文学であり、その一種の危険性をはらめばこそ、文学は自由な思考への強力な道しるべとなるのである。中等教育においても高等教育においても必要最低限のモラルで自らをまた生徒ら/学生らを律しつつ、文学を教材に用いることの意義を根底から覆しかねない、安易な自粛と保守的思考は、厳に戒めるべきである。なお強調しておきたいのは、授業で用いるのがretold版であるにせよ、教師側の側は原著を読み十分に理解しておく必要があるということである。その覚悟の点で当該グループのジェイムズの選択にはいささか不安が見られたことを付記しておく。

2-(6) ゲド戦記4

アーシュラ・K・ル＝グウィン(Ursula Kroeber Le Guin, 1929-)による壮大なファンタジー小説『帰還 ゲド戦記4』(*Tehanu: The Last Books of Earthsea*, 1990)の一部が選択された³⁶。『アルジャーノンに花束を』よりも更にSF性の高い作品と言えよう。計7時間で第12章を読む計画である。『ゲ

³³ たとえば Kelly Cannon, *Henry James and Masculinity: The Man at the Margins* (London: Palgrave Macmillan, 1997) を参照。

³⁴ この点については北星学園大学の斎藤彩世氏に教示を受けた、記して謝す。

³⁵ Pavloska はヘミングウェイ作品が作家の「冰山理論」に基づく『行間を読ませる』ことを余儀なくさせる方法を取っている」ので「読者は語彙に依存しすぎることをなしに、自分からアクティブに読みとらざるを得ない」と述べるが、これはジェイムズ始め他の作家・作品にも当てはまることであろう。Pavloska, 163。

³⁶ Ursula Le Guin, *Tehanu: the Last Book of Earthsea* (Penguin Books, 1992)。『帰還 ゲド戦記4』清水真砂子訳(岩波少年文庫、2009)。

ド戦記』は長大なクロニクルであり、第4巻に至るまでのあらすじがA4一枚にまとめられ配布されたのは非常に有益であった。配布資料には「(未亡人となった) テナーは生活の中で幾度もフェミニズムの問題に直面する-後略-」とあり、第七回目の授業「作品から読み取れる女性蔑視について考える」という設定の模擬授業では12章中の2頁が配布された。この中のテナーによる「We're precious. So long as we are powerless」(ママ)がワークシート冒頭に付され、1)なぜ女性はpreciousなのだろうか2)なぜ女性はpowerlessと表現されたのだろうか3)本当に女性はpowerlessなのだろうか4)現在の社会はどうだろう、また自分の考えはどうだろうかの四問が、思考の展開を導く順で並ぶ。まずは「powerlessであるがゆえにpreciousである」という一見非合理に見えるテナーの台詞が抜き出されたことを評価したい。この矛盾とも見えるインパクトによって、模擬授業自体、スピード感が増し、議論の密度も高まった。各設問に対しては「子孫繁栄の面での重要性」「物理的な力の弱さ」など通常予想されるものから「男性の強さを保証するための『弱さ』」という、19世紀中葉における「同性愛の『発明』」³⁷と同じ構造を認識した鋭い指摘までが現れ、大いに湧かせた。邦訳も配布され、「もし女が力をもったら、男は女になるしかないじゃないか。子どもの産めない女にね。そして女は男になるわけか、子供の産める男に」「もしも一方の②強さがもう一方の②弱さに支えられているのだとしたら、②強い方も絶えず不安を感じていなければならない」(以上ゲドの台詞、下線等ママ)「でも、女たちは自分自身の強さを恐れているようにも見えるけれど。なんだか自分のことを怖がっているみたい」(テナーの台詞)など、ジェンダー・セクシュアリティという本授業のテーマに直近の距離で即した対話の場面の選択は、評価されるべきものである。対話という形式そのものが読み易いものであることもここから学び得られよう。なお上述の他に、上記

の下線やナンバリング部分に即した、さらに踏み込んだワークシートも用意されていたことを付記したい。なお上述のwe're precious…であるが「ママ」としたように、一重鉤括弧内に英文が示されていた。このような日本語(の記号)と英語の混用は英語関連科目を専門にしない受講者もあれば起こり得る間違いであるが、専門の如何を問わずレポートや論文作成時の英語文献の表記において不可欠な知識として、その訂正指導には徹底を心がけたい。

後述の『緋文字』のケースにおいて教材として長編を扱う難しさを述べるが、『ゲド戦記』のようにその長編が更に連なる長大な作品でも、教材となり得ることが示された。その際には1)全編のあらすじをまず説明する2)特定のテーマに絞る3)ごく短い箇所のみを教材とする4)端的かつ印象的な表現(当該グループの発表においては“we're precious…”)をもって導入とする、等のポイントが当該グループの成功に鑑みて述べられよう。また対話という形式が、相互にやりとりされるリズム性ゆえに読み易く、授業のテーマも見つけやすい作品の箇所であることも改めて明らかとなった。SF小説は読者層が限られる一面も持つが、昨年度のアシモフのように³⁸古典的作品を教材として英語教育に導入することで、生徒に新しい世界への展開をもたらす効果も期待できよう。なお日本ではゲド戦記の名が浸透しているが、原題はかなりニュアンスの異なるものであることに注意したい。このような邦訳と原題の乖離についても、文学作品を英語教育教材として用いる際にはぜひ言及して、批判的視座の育成に役立てたい。

2-(7) ポー “To F--”

再びポーの韻文作品「Fに」(“To F--,” 1835)である³⁹。ポーは韻文と散文の両面において偉大な業績を残した、アメリカ文学史上でも稀な存在であり、そのことに触れることも一案であろう。指導案では生徒の想定に「クラス内での男女の仲

³⁷ デイヴィッド・M. ハルプリン『同性愛の百年間 ギリシア的愛について』石塚浩司訳(法政大学出版局、1995)27-32および(7)-(14)参照。

³⁸ 拙稿、98-99。

³⁹ 渡辺信二訳『アメリカ名詩選-アメリカ先住民からホイットマンへ』(本の友社、1997)、120-21。

は良いが、恋愛観などに関する話に関して、普段は話をしている様子は見られない」との表記がある。あえて「男女の仲」と記すところに、既述の強制的異性愛の刷り込みの深さがうかがわれる。本授業の異性愛も、数ある愛の形、多様性の一つに過ぎないというテーマが無意識にまで浸透するにはやはり相当な時間がかかると思われる。全3時間、「目標」における「独特の表現や音韻（リズム）に気づき、その面白さを味わう」との記述は、すでに第一ローテーションにおいて韻文を二回扱った際の、韻文を扱うメリットを利用すべきとの指摘が反映されたものであろう。「作品を通して、誰かを想うことについて考える。また、様々な恋愛観についても紹介し理解を深めたい」との最終目標に、英語での詩の創作「誰かに向けて思いを伝えよう」というワークシート課題が模擬授業でも実施された。配布教材はポーの伝記史実についてのA4一枚、「To F--」の全文と「自分で詩を作ろう！」というワークシート部分および裏面に邦訳が付されたA4が一枚である。初回のポー作品“*To My Mother*”においては邦訳と原文が同じ面に印刷され且つ邦訳が大きなフォントで1/2以上を占めるというレイアウトの不備が見られたのに比し、今回は改善がなされたわけである。英語指導の面においてはhaveの直接法三人称単数現在形の古語ないし詩的用法であるhathが現れるので、その説明が必要となる。

それぞれに恋愛をめぐる詩が発表されたが、特筆すべきは教師役の男性学生が自らの詩を発表する前に自身の「ホモセクシュアリティをカミングアウト」したことである。それが学生自身の真実の「カミングアウト」であったのか、模擬授業上の「演出/演技」であったのかはメタレベルでの進行役である筆者はあえて問わず、当該学生への探求がそれ以上行われることもないように、とりあえずは受講者にその場で念を押した。「演出か真実かは問わない」ということを、淡々としかし決然とそれ以上の探求を遮断したのである。学生は「先生は実は男の人が好きで……」と口ごもりながら「特定の」同性への想いを託した詩を発

表したのである。このような展開は筆者自身まったく予測していなかったので、当惑の極みであった。しかしまずは当該学生の意気に敬意を表するものである。その上で、「中学3年生の英語教育の授業において、教師が自身の「性的指向 (sexual orientation)」を生徒に向けて明らかにすることについての議論が行われた。受講者らも当惑しており結論はもとより明確な意見も出にくかったが、筆者は「いまだ」同性愛への偏見が根強い日本社会において（であればこそ、本授業のテーマも意義をもつのである）、義務教育の授業中の教師のカミングアウトは保護者等からのクレームを招きやすく、その結果同性愛などセクシュアル・マイノリティへの偏見とそれに基づく実際の行動をかえって惹起する/強化する、逆効果となってしまう可能性が高いとの意見を表明し、否定は避けたものの、極めて慎重な準備と配慮が求められるとのコメントを表した。しかしながら「ヘイトスピーチ」という外来語が跋扈する2014年現在の日本社会の状況に鑑み、その語の起源たる欧米においては人種と性的指向がヘイトスピーチの二大根拠となることに比し⁴⁰、日本では専ら特定の民族ないし国家への暴言・暴動を示すという矮小化が見られることにまで議論が広がる契機となった。ジェンダー・セクシュアリティをテーマに持ち込んで学期も終わりに近づいた授業での、実に成熟したその展開であった。なお当該男性学生は上述のような言葉遣いを用いたが、これは非常に重要なことである。「一は～である」、英語で言うならば「主語-be動詞-補語」の第二文型による自己言及の仕方は、現行の異性愛中心主義のジェンダー・セクシュアリティの枠組みに自ら積極的に参加してしまうことであり、クイア(理論)の最も忌避するアイデンティティの「固定化」に直結する。筆者自身SVC型のカミングアウト自体には非常に懐疑的であるが、そこまでは述べることをしなかった今期の授業の終盤に、このような「カミングアウト」が行われたことは、この点でも興味深い。

2-(8) *The Scarlet Letter*

⁴⁰ hate speech の仔細な分析については Judith Butler, *Excitable Speech* (Routledge, 1997) 参照。

ナサニエル・ホーソーン代表作、長編『緋文字』(*The Scarlet Letter*; 1850)、全編を原著のまま扱うという壮大な計画である。中学3年生35人学級を想定しており、「ジェンダーセクシュアリティ(ママ)についても、興味はあるが表には出さない生徒が多いとする」との記載である。本講義は常に差別被差別の問題系が絡むため、用語の記載には正確を期する必要がある。誤った呼称や短縮形によって、被差別者の苦難の歴史が続いてきた経緯があるからである⁴¹。上記の部分についても「ジェンダー・セクシュアリティ」が正しい表記である。指導計画は全6時間、初回においてDVDを通して作品の概要説明を行い、二回三回でワークシートを通しての内容理解、四回目でAの文字があらわされている部分の英文を読み、五限で「姦通罪」に対する考え方に着目し六回目でまとめという指導案である。ジェームズはretold版を用いることで難解さを乗り越えることが出来たが、本グループは原著全編ということなので、「辞書を使って分からない単語を調べよう」との指導案が示された。模擬授業では姦通罪についての理解、また恋人一人に罪を負わせて自らは沈黙するという、作中のディムズデル牧師の行為についての議論が中心となった。なお既に記したように、授業計画内の五限が中心とはなりつつも、同時に学部教育のプレゼンテーションでもあるため、それ以外の時限の内容も模擬授業に入ってくる。「あなた自身は、この胸に縫い付けられたAという文字は何を表していると思いますか」というワークシートの問いには、adulteryという語そのものの説明が不十分であったため、正答は得られなかったが、不定冠詞のa、リンゴを示すapple等、むしろ通念的な理解よりもより深い読解に繋がる興味深い意見が見られたことは、大学生であればこそということ差

し引いても、意義深いことであった。

作家についての資料2枚、両面印刷のワークシート2枚そして指導案1枚が配布されたが、この19世紀アメリカ・ルネサンスを代表する長編を6時間で中学3年生の教材として扱うためには、計画に至らなさが見られた。また模擬授業/プレゼンテーションそのものに関しても、DVDやコンピュータを使用する予定であったものが機材の確認が出来ておらず口頭での発表となり、そして何よりも批判されるべきは原文ではもちろんのこと、翻訳でも作品を読んでいなかったことである。ゆえにワークシートの設問にも作品と矛盾する記述が見られ、教員たる筆者もたびたび疑義を差し挟まざるを得なかった。「姦通罪」という異性愛主義かつ男性優位主義下の結婚に付随する問題に焦点を当てたことは評価されるべきであり、そのことを論じる作品として『緋文字』を選択したこともまさに正統的と言える。同一の問題に対する男女の意見の違いを見ようとした試みにも独自性が見られたが、準備自体に絶対的な不足が見られたことは非常に残念であった。長編を原書のまま扱う場合、昨年度の『老人と海』のように全18時間という相当な時間数を設定して最終的に文化祭で演劇として発表するという、クロスジャンルの試みが必要でもあろうし⁴²、最低限今年度の『日はまた昇る』のように、全体のあらすじを俯瞰しつつ、テーマに即した章を一つ採択するのが、ぎりぎりのところであろう。先に韻文を扱う際の、押韻やリズムの知識という条件を記したが、長編の散文はまず何よりも原著で読まなくてはならないし、その覚悟なしには扱うべきではない。なお難解な作品を教材に扱うこと自体に関してはあらためて、関戸も指摘する「ある教材への補助的な導線」である「スキャフールド(scaffold)的

⁴¹ 2002年に「精神分裂病」から「統合失調症」に日本語表記が変わった障害(schizophrenia)に関しては、例えば欧米圏では同一の表記であるものをあえて時代性等を考慮し「分裂病」等と日本語に翻訳する際、非常な心遣いが払われるが同性愛関係についてはいまだ差別語の使用に対して何の配慮も払われない。一例としてF.スコット・フィッツジェラルドの『夜はやさし』(*Tender Is the Night*, 1934)の最新訳である森慎一郎訳の作品社版(2014)に付された表記を参照。伊藤は日本人に対する蔑称が「ジャパニーズ」を縮めた「ジャップ」になるように、短縮形が往々にして侮蔑表現となることを示しつつ、「ホモセクシュアル」の略称「ホモ」が、日本社会におけるその語の使用経緯に鑑みても、明らかに侮蔑語であることを述べる。伊藤悟『同性愛の基礎知識』編集協力やなせりゅうた(あゆみ出版、1996)、87。

⁴² 拙稿、99

⁴³ 関戸、77。

的に多かったが、散文においても種々のジャンルが存在することの良い教示となろう。指導案には「他者の意見にも耳を傾ける」の記載が見られたが、当り前のこととはいえ、これがそもそも文学を教材に用いる意図と直結するものであり、改めて指導案に表記されたことは今後の範として強くその意義を示したい。

2-(10) “To Helen”

ポーの韻文作品が続く。計3時間で「ヘレンに」(“To Helen,” 1831)⁴⁶を扱い、第二回までで作者や時代背景の知識、邦訳や韻律の確認、実際の音読は済んでいるという設定のもと、模擬授業では最終第三回のYouTube視聴とワークシート課題が行われた。当該グループはYouTubeを模擬授業に用いた唯一のケースであった。詩の朗読のみでなく、映像と音楽の入ったものであったが、ネイティブがいかにも韻文である原文を捉え、それを音声化するかということ英語教育教材に韻文を選ぶ以上不可避であり、その際にはぜひ積極的に動画を含むオーディオ教材を取り入れたい。用いられた動画にはエリック・サティのピアノ曲が用いられていたが、映像と併せ、教材となった作品にはどのような音楽が合うかを議論することも、内容理解へのまた異なったアプローチとなろうことを筆者は指摘した。

「ヘレンに」は友人の母親に宛てて書いたものとの説明がなされ、妻の母親に宛てた“To My Mother”とともに、ポーの成人女性への憧憬傾向が確認されることとなった⁴⁷。ワークシートでは理想のパートナー像とその反対、理想の人のモデルとその理由が問われ、まさに多様性に満ちた結果が聞かれた。特に自身の父親/母親を挙げる学生が筆者の予想をはるかに上回る多さであったが、逆に母親のような人は厭という意見も現れ、学部教育においてはまだしも、生活環境・家庭事情のこれもまた多

様性の現場である中等教育の教室において、家族の問題がトピックとなる際の教員側のマネジメントの難しさを確認する結果となった⁴⁸。特に肉親に対する否定的感情が出た場合、早めにストップをかける必要がある。

また理想像のモデルを探るワークシートの最終設問では理想像のモデルとして、芸能人の名前などを挙げる受講者もいたが、筆者にはこの設問の意義が掴めず、当該グループにも問うたが、明確な答えは返ってこなかった。上記のように多様性ということを引き出すことを念頭に置いた設問であったと推定されるが、より効果的な異なるアプローチがあるのではないかと指摘に至った。加えてこれは最初にポーが扱われたケースで実際に授業でも述べたことであるが、ポーの場合近親姦や幼児性愛、ネクロフィリア(屍体性愛)等のモチーフが頻出するゆえに⁴⁹、「多様性」の教材としてはある面で適当とも言えるが、それらのトピックを採配するだけの知識と覚悟が教員側に求められることを再度確認したのである。

・おわりに

重ねて記すように、本授業の一番の難しさは「筆者＝教員、受講者＝学生」という外枠の内に「学生＝教師、想像上の中学生/受講者/筆者＝生徒」という枠が絶えず有機的に連動しつつ進むというその二重性にある。模擬授業も指導案そのまま50分用いられるわけではなく、教師役たる学生に、教員の筆者が途中で種々の指導を行うという次元の交錯が起こる。プレゼンテーションとしての模擬授業の難しさが学生側には常に存するのであるが、それは同時に本授業が、中等教育と高等教育というクロスジャンルの試みであり、それが散文・韻文を自由に教材として選び使うというもう一つのクロスジャンルに繋がる、極めて能動性の高い運動であることの証左でもあるのである。筆者＝教

⁴⁷ *Romantic Poets: Blake to Poe*, eds. W. H. Auden and Norman Holms Pearson (New York: The Viking Press, 1950). 壺齋藤散人訳、*English Poetry and Literature* <http://poetry.hix05.com>. 2014/7/20 アクセス。

⁴⁸ ポー2歳の時に実母が死去したため、彼は生涯母親的な女性に憧れた(渡辺『文学史』352)。

⁴⁹ 拙稿、100。

⁵⁰ 渡辺利雄『アメリカ文学史』55-6、渡辺利雄『講義アメリカ文学史[全3巻]東京大学文学部英文科講義録第1巻』(研究社、2007)、352-3参照。

員側も、模擬授業においてメタレベルで俯瞰する指導者の位置に安住できるものではなく、常に他の受講者同様にワークシート課題に取り組み、教師役の問いかけに積極的に「生徒として」答えてゆく柔軟性が求められる。特にジェンダー・セクシュアリティのテーマ内で授業を計画することを課した今期の場合、最終的な指導者＝責任者たる筆者教員の役割は重い。このテーマにおいて学生の積極的参加を促すためには、常に自らを「さらけだす」ことが教員側に求められるといえよう。しかしそうであればこそ、例えば「Fに」における事例のように、学生側もこちらの予想をはるかに超える形でそれに応えてくれるのである。更に述べるならば、ジェンダー・セクシュアリティ研究、クイア・スタディーズの政治学においてはまず正しいこととされることが、中等教育の実践現場では必ずしも適切ではなく、「強制的異性愛」「異性愛中心主義」のもとに創り上げられた括弧つきの「性的マイノリティ」の解放という目標は同じでも、“To F--”の項で述べたように、より緻密で慎重な態度・戦略が求められるという点に注意したい。前期中等教育という枠組みの中で、文学という「他者への共感」の涵養に最適な教材を、更に踏み込んで「性の多様性」の教材にまで広げる筆者の試みについて、さらに多くの実践・研究の輪を求めたい。